

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00631

研究課題名（和文）日本語における「視点」の研究 - 日英対照の観点から -

研究課題名（英文）A Research on "Point of View" in Modern Japanese - in terms of contrastive linguistics between English and Japanese-

研究代表者

大島 資生 (Oshima, Motoo)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：30213705

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語における「視点」をあらゆる要素を、アスペクト・テンス・話法にまで拡張して取り上げ、それらを統合的に扱える枠組みを構築した。合わせて日本語原文とその英語訳とを対照することで、日本語の「視点」の特性をより明確にした。また、日本語の「視点」はこれまで言語体系での位置づけが明確にされてこなかった。たとえば文構造を命題とモダリティに大きく二分する立場があるが、その議論の中でも「視点」の位置づけは明らかではない。この点についても、「視点」を担う表現を統合的に扱う枠組みの検討を通じて明らかにしようとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、膨大な研究がなされているアスペクト・テンス研究について、視点という概念を取り入れることで、この2つの概念をこれまでとは異なる角度からとらえ直す可能性を開くことができた。この方向で研究を蓄積していくことによって、近年大きく発展している語用論の中での位置づけにも繋がるのが期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, I expanded the concept of "point of view" in contemporary Japanese language, including such notions as aspect, tense and direct/indirect speech. At the same time, I make the characteristics of "point of view" much clearer through comparing Japanese texts and their English translations. The concept "point of view" in Japanese language has not been clearly located in the language system. For example, It is not clear how to locate the concept "point of view" in the framework of proposition and modality in sentence structures. I tried to give a solution to this problem through considerations on "point of view" expressions.

研究分野：日本語学

キーワード：視点 文法 テンス アスペクト 語用論

1. 研究開始当初の背景

従来の日本語研究において「視点」という概念は、主として受身や授受動詞、そして本動詞・補助動詞としての「(～て)いく」「(～て)くる」などの用法を記述する際に用いられてきた。たとえば、日本語学会(編)(2018)『日本語学大辞典』(東京堂出版)「視点」の項目(山田敏弘執筆)では「事態を言語的に捉え描く際の空間的・心理的中心点を指す文法用語」とされ、具体的に取上げられているのは「行く」「来る」と授受動詞のみである。だが、実際の文章を観察すると、テンスや話法(特に、地の文の中に登場人物の内心発話をそのまま取り込む「描出話法」)が視点の切り替えが示していることもよくある。

そこで、本研究では「視点」をあらゆる要素を拡張して、テンス・話法なども取り上げ、それらを統合的に扱える枠組みを構築することとした。合わせて日本語原文と英語訳とを対照することで、日本語の「視点」の特性をより明確にしようとした。また、日本語の「視点」はこれまで言語体系での位置づけが明確にされてこなかった。たとえば文構造を命題とモダリティに大きく二分する立場があるが、その議論の中でも「視点」の位置づけは明らかではない。この点についても、「視点」を担う表現を統合的に扱う枠組みの検討を通じて考察することとした。

2. 研究の目的

従来、視点に関わる表現としてさかんに考察されている受身、授受動詞、「(～て)いく」「(～て)くる」に加え、これまで十分に研究されてこなかった、テンスや話法を、テンス、話法、～と(接続助詞)、～ている(アスペクト)の各項目を取り上げて考察・記述する。

その上で、日本語母語話者が「視点」として捉えている現象全体を、これまで扱われてこなかった表現項目も含めて統合的に扱う枠組みを検討・構築する。

検討に当ってはデータとして日本語で書かれた文章、主に小説を用いる。あわせてその英語訳との対照をおこなう。これにより、日本語と英語における「視点」のあり方の差異を浮き彫りにし、通言語的に「視点」を捉える。

3. 研究の方法

まず実際の日本語の文章から視点を表現する項目(受身、授受動詞、「(～て)いく」「(～て)くる」、テンス、話法、～と(接続助詞)、～ている(アスペクト))が用いられている箇所を抽出し、当該箇所が「視点」が「切り替わっている」と解釈できると判断された用例をデータとして考察を行なった。原データとしては近現代の小説を用いた。視点の切り替えは、論説文などよりも物語文において頻繁に生じると予想されるためである。

次に、用例をもとに各表現項目自体の特性を考察する。並行して項目間の相違点を洗い出すため、各項目が出現する文脈の違い(各項目が用いられる文脈・場面の特徴)を検討した。

表現項目自体についての考察と同時に、原文と、その英訳を用いて日英語の対照研究をおこなった。二つの言語を対照することによる利点として、「視点」に関して、より普遍的な捉え方が可能になるということが挙げられる。上で挙げた、受身をはじめとする表現項目は多くの言語に広く見られる。そこで、日本語においてそれらの項目が関係している視点にも言語間の共通性が存在すると予想される。他方で日英語の間に差異も存在する。こうした比較・対照を通じて、日本語の視点の特性がより明確になることを期待した。

4. 研究成果

○はじめに

本研究においては、現代日本語のテンス・アスペクトを視点表現として捉えることを提案し、特にこの2つのカテゴリーについて集中的に考察をおこなった。以下、その成果について記述する。

本研究では、「視点」という概念の捉え方を精密化するとともに、テンスとアスペクトの関係についてさらに考察と整理をおこなった。これに基づき、単文のみならず、従属節テンスの解釈のメカニズムについて考察した。そして、日本語のテンスとアスペクトは相互依存的な関係にあると結論付けた。

○「視点表現」と「観察」

まず、本稿で用いる概念について説明する。視点表現とは、ある事物を言語で表現するにあたって、当該の事物をどこから、どのように捉えるかということが明示されている表現をいう。ここで、事物をどこから捉えるかを「視座」と呼び、捉える方向を「視線」、さらに、視線が当てられる事物(の部分)を「注視点」と呼ぶ。また、言語による表現を行なう際には、当該事物の性質を把握するため、その特徴を視覚をはじめとする感覚を用いて走査する必要がある。この走査のことを「観察」と呼ぶ。一つの事物をカメラで捉えることになぞらえれば、「視座」はカメラを設置する場所、「視線」はカメラを向ける方向、カメラが写している対象が「注視点」である。また、カメラで捉えていることが「観察」にあたる。

○主節のテンス・アスペクト

本研究では、テンス・アスペクトに関わる事物について以下のように捉える。世界の中で生じるもろもろのことがらを「事態」と呼ぶ。事態には、いくつかの種類がある。まず、「走る」「食べる」など物理的な運動を伴う行為を、ここでは「動き」と呼ぶ。また、「落着く」「腐る」など、事物の状態が移り変わることを「変化」と呼ぶこととする。動きや変化は、ある時点で「生起」する（「動き」も「変化」も、一瞬で終わる場合があるため、「開始」ではなく「生起」と呼ぶ）。また、一定の時間、何らかの等質的な動きや「状態」が続く場合がある。これを「持続」と呼ぶ。等質的な動きが続く場合の典型的な例は以下のようなものである。

- (1) ステージでピアニストがピアノを弾いている。
- (2) 吉岡さんは毎日ジムに通っている。

一方、「状態」とは、事物の性質が動きも変化もなく存在し続けていることである。

- (3) このパンはおいしい。
- (4) テーブルの上にコップがある。

事態は「生起」し、「持続」のあと「終結」する。すなわち、動きや変化は時間の流れの中で「生起 持続 終結」のように推移する。こういった推移を「時間的展開」と呼ぶ。そして、時間的展開を構成する「生起」「持続」「終結」などの諸要素を「局面」と呼ぶ。

さて、言語主体が動きや変化を把捉するには、動きや変化の生起を認識しなければならない。また、状態を認めるには、ある性質が一定の時間にわたって、動きや変化が生じることなく存在し続けていることを認識することが必要である。そのために、事態（の一部分）を走査することが、先に挙げた「観察」である。

こういったことを踏まえて、大島(2022)では、アスペクトを次のように定義づけた。

アスペクトは、当該の動きや変化の中の時間的展開のうち、ある局面についての観察を報告するカテゴリーである。(大島(2022) p.4)

テンスは、ある動きや変化の観察時が基準時からみて時間的に前か後かを示すカテゴリーである。(大島(2022) p.23)

現代日本語で、動き / 変化をあらわす動詞のル形が文末で用いられた場合、当該のことがらがごく近い未来に生じるということをあらわす。次の例がその典型的なものである。

- (5) (解体工事で、仕掛けられた爆薬が爆発して建物が) 倒れる！

先に述べた通り、動きや変化を把捉するには、その動きや変化の生起を認識する必要がある。動きや変化の生起を認識するには、[動き / 変化が生じていない状況] [動き / 変化が生じている状況] という局面の推移が捉えられなければならない。さらに、局面の推移を捉えるには、推移する直前から事態の観察を始め、推移が確実に捉えられるまで観察を続ける必要がある。ル形はこの生起への推移をあらわすので、直前から観察することを意味的に含む。そのため、ル形が文末に用いられた場合はごく近い未来をあらわすこととなる。

他方、タ形は事態の終結への推移をあらわす。この場合、生起の場合と対称的に[動き / 変化が生じている状況] [動き / 変化が生じていない状況] という局面の推移が捉えられなければならない。たとえば、医師が患者を看取って「ご臨終です (= 亡くなりました)」と告げる場合、それより少しだけ前の時点で[拍動が認められる状況] [拍動が認められない状況] という推移を捉えている。

以上を踏まえて、局面の把握の仕方をさらに詳細に検討してみよう。

言語主体による局面の把握を視点現象だと考えると、以下のように記述できる。まず、ある時点で視座が置かれて、その時点から観察が開始される。上述の通り、観察は一定の時間的な長さにならざるを得ないので、一瞬ではなく、一定の時間的な広がりを持つ。つまり、観察時とは一定の時間的な幅をもった期間である。その期間の中で局面の推移(状態など[持続])の場合は推移がみられないことが確認された時点で観察は終了する。そして、当該事態が、その時点よりも時間的に後と捉えられる場合には、観察は時間的に後の方向に向かってなされ、ル形が用いられる。逆に時間的に前と捉えられる場合、前の方向に向かって観察がなされて、タ形が用いられる。

いずれの場合も、当該事態の生起(開始)時点で視線が向けられ、観察時(期間)が設定される。

また、テイル形の場合、ある時点において観察がなされ、一定の時間にわたって等質的な動きや変化が持続する、もしくは動きや変化がなく、等質的な状態が持続することがあらわされる。

上でみたのは、いわゆるアスペクトの把握である。ここでの観察にあたっては、俯瞰的に事態全体をみているのではなく、事態の部分、すなわち[生起]、[終結][持続]という個々の局面を

観察していると考える。

さて、事態を時間軸上において捉える際の認識のしかたは、時間軸上において一方向的 (uni lateral) なので、事態の全体を俯瞰することができないと考えられる。次のことがその証拠となる。

- (6)a. この電車はまもなく動きます。
b. この電車はまもなく動きました。

(6a)のル形を用いた場合は、「まもなく動くところだ」と解釈できる。ル形は先に述べた通り、ある時点で視座が置かれ、そこから時間的に後の方向へ視線が向けられた事態の生起を捉える。他方、(6b)の夕形の文は、「まもなく動くところだった」とは解釈できない。事故など何らかの出来事が生じて、そのあと「まもなく動いた」という内容をあらわしている（そして、現在動き続けているかもしれないし、すでに止まっているかもしれない）。すなわち、夕形はある時点で視座がおかれ、そこから時間的に前の方向に視線が向けられて事態の終結を捉えるものであり、生起を捉えることができない。

これに対して、ル形は動きや変化の終結時点をあらわすことができない。

- (7) (大食い競争で肉を次々にほおばっている人をさして)
a. ?あいつ、もうじき肉5キロ食うぞ。
b. あいつ、もうじき肉5キロ食っちゃうぞ。
(8) (持久走で) ??あいつ、もうじき50キロ走るぞ。(大島(2022)(20)(21))

(7a)の「食う」というル形は、「肉50キロを食い終わる」ということをあらわすことができない。つまり、終結時点をあらわすことはできない。もちろん(7b)の「食っちゃう(食ってしまう)」のように、「～てしまう」を付加するなどすれば動作の終結を取り出すことは可能だが、「食う」というル形自体が終結をあらわすことは不可能である。(8)も(7a)と同様である。

このようなル形・夕形の解釈についての制約は、日本語の時の捉え方の特徴を示していると考えられる。

また、ル形の場合、生起の時点よりも「少し前」から観察することとなる。それゆえ、ある時点で視座がおかれて、観察が始まる。その時点から生起の時点に視線が向けられる。そのため、視線の方向は、[過去 未来]という時間の流れと同一になる。他方、夕形では、終結時点よりも後の状況までを確認しなければならないため、終結時点よりも後の時点で視座が置かれ、終結時点で視線が向けられることとなる。そこで、視線の方向は[未来 過去]となり、時間の流れとは逆の方向になる。

以上のことから、ル形・夕形の解釈は、観察時と注視時点との時間的前後関係を含んでいることがわかる。したがって、ル形・夕形が生起(開始)/終結時点を捉えることは、アスペクト把握というよりもテンス把握の一種と理解すべきではないかと考えられる。このように捉えれば、テンス・アスペクトを統一的に理解することができる。

○カテゴリーとしてのテンス・アスペクト

日本語におけるテンスとアスペクトの把握の仕方は、いずれも視点を基軸としていると考えることができる。しかしながら、このように把握することは、日本語にテンス/アスペクトというカテゴリーの違いが存在しないと主張するものではない。日本語話者にとってはこの2つのカテゴリーは区別されているものと考えている。

○従属節テンス

前節までは、単文のテンス・アスペクトについて考えてきた。本節では従属節のテンス、特に連体修飾節を取り上げて検討する。まず、次の文のテンス解釈を考えてみよう。

- (9) ゼミで読む本を買った。

この文の解釈として、

- 「ゼミ」が発話時よりもあとの場合(発話時基準)
「ゼミ」が主節時よりもあとの場合(主節時基準)

の両方がありうる。そして、従属節事態と主節事態の関係、さらには言語外の情報を総合してどちらを基準時とするかが解釈される。このことは、従属節のみの段階(「ゼミで読む」)では基準時を定めることはできないことを示している。すなわち、従属節、この場合連体修飾節そのものは、基準時を持たない(基準時が決まらない)と考えられる。このように、従属節のテンス解釈においては、主節時を基準とする場合がある。ではなぜ従属節は主節時が基準となりうるのだろうか。

ここでは、従属節は基準時が「欠けている」状態にあり、基準時が定められて初めて文全体の

完全な解釈が得られると考える。

主節には2つの時が含まれている。発話時と、主節事態の観察時である。発話時は、文字通り当該の発話がなされる時点である。他方、主節の観察時は文に表現される事態が観察される時である。観察の視座は発話時に置かれる。すなわち、発話時は基準時でもある。3.で述べた通り、観察という作用においては、ある期間の間(基本的にはごく短い時間)当該事態に視線を向け、それが動き・変化なのか、状態なのかを判断する必要がある。そして、発話時(=基準時)において、すでに生じたと言える(過去)事態に関してはタ形が用いられる。発話時においてすでに生じたとは言えない(非過去)事態については、ル形が用いられる。

他方、従属節を含む文では、日本語の語順の性質上、従属節から解釈が始まる。従属節は基準時を定めることが要請される。処理が主節に及んだとき、従属節の基準時の候補として、主節の発話時と観察時が取り出される。どちらが基準時となるかは、従属節事態と主節事態の関係などをもとに決められる。

○おわりに

視点という概念は非常に広い射程範囲をもつと考えることができる。ここではテンス・アスペクトを扱ったが、比較、評価も視点表現として捉えることができるのではないかと考えている。あるいは、視点現象を考えた際にも利用した、より基本的な「観察」による表現行為として括ることを考えるべきかもしれない。今後の課題としたい。

/参考文献/

- 岩崎卓(1998)「連体修飾節のテンスについて」『日本語科学』3 国立国語研究所 pp.47-66
大島資生(2008)「連体修飾節と主節の時間的關係について」『日本語文法』8-1 日本語文法学会 pp.101-117
大島資生(2011)「日本語連体修飾節構造の時制解釈について 修飾節・主節がともにタ形述語をもつ場合」『日本語文法』11-1 pp.54-70
大島資生(2014)「外の関係の連体修飾節におけるテンスについて」
益岡隆志ほか編(2014)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房 所収
大島資生(2016)「連体修飾節からみる現代日本語アスペクト」
『人文学報』512-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1-18
大島資生(2020)「日本語連体修飾節の意味的特性について 主節との対比から」
『人文学報』516-11 首都大学東京大学院人文科学研究科 pp.1-30
大島資生(2022)「視点現象としての現代日本語のテンス・アスペクト試論」
『人文学報』518-11 東京都立大学人文科学研究科 pp.1-30
寺村秀夫(1977)「連体修飾のシンタクスと意味(3)」
『日本語 日本文化』6, 大阪外国語大学研究留学生別科 pp.1~35
(寺村(1992)所収)
寺村秀夫(1992)『寺村秀夫論文集』くろしお出版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大島資生	4. 巻 518-11
2. 論文標題 「視点現象としての現代日本語のAspect・テンス試論」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人文学報』（東京都立大学大学院人文科学研究科）	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島資生	4. 巻 1
2. 論文標題 「日本語の相対名詞連体修飾の意味的特性」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ブラザント・パルデシ、堀江薫編『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島資生	4. 巻 517-11
2. 論文標題 「類義語「ごく」「いたって」の意味特徴について」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人文学報』 東京都立大学大学院人文科学研究科	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島資生	4. 巻 519-11
2. 論文標題 「視点現象としての現代日本語のAspect・テンス試論（続）」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『人文学報』（東京都立大学大学院人文科学研究科）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島 資生	4. 巻 18-1
2. 論文標題 〔書評〕「三好伸芳著『述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾構造』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『日本語の研究』（日本語学会）	6. 最初と最後の頁 110-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.18.1_110	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 林 四郎、篠崎 晃一、相澤 正夫、大島 資生	4. 発行年 2021年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 1392
3. 書名 例解新国語辞典 第十版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------